

金属洋食器

洋食器製造の歴史は新しく、それまでの銅器・キセル・ヤスリなどの金工技術を用いて、大正初期に手造りで試作されたのが始まりである。

当時はスプーン、姫フォークなどが主として造られていった。現在は機械化が進んでほとんど自動化し、生地も真鍮板からステンレス板に変わっている。

手造り製造工程は、真鍮の地金を火造り場で金床を台にして一本ずつせんつちで分出しをして炉でなましを繰り返したのち、つちで平延べと首寄せをする。

それをさらに板延べして硫酸はぎをして、柄ならしをしたものを仕事場で、台切りで柄切りして、せんで削り、ヤスリやサゲで削り、木型と鉛型を用いてつちで皿起こしをし、洗いおけの中だと石や朴の木炭で磨く。

最後にメッキをほどこして仕上げとなるが、手造り時代の仕事場及び作業用具から自動化へ移行される初期の輸入研磨機、スライス盤の手造り洋食器、工程見本など本市産業の中核をなしている洋食器の初期の技術を伝えている。

上記の工程は、燕市産業史料館でご覧いただけます

燕市産業史料館 燕市大曲 4330-1 TEL.0256-63-7666

